

新人教員が、新校立ち上げに携わって

犬塚 竜司（埼玉県立飯能高等学校）

1. はじめに

私は、埼玉県立飯能高等学校に勤める4年目の英語教員である。現在は、3年生の担任を務めており、部活動はサッカー部を担当している。校務分掌は広報情報管理部に所属しており、校内の情報機器の整備や、生徒募集を主たる目的とする広報活動を行っている。この報告では、前半部分は統合する学校に勤務していることで経験することができた苦悩や取り組みを紹介する。後半部分では、教員として4年間過ごしてきて感じたことや、学んだことを紹介する。現職の方や、私と同じような若手教員、教員を志す学生、教員になることを迷っている学生に何か伝えることができたらという思いを込めて執筆した。

2. 新校立ち上げの背景

埼玉県では少子高齢化や変化の激しい社会を生き抜く生徒の育成をするために「魅力ある県立高校づくり」が令和元年から始まった。この取り組みは、公立学校の活性化と特色化を図るものである。公立中学校卒業生予測では、2017年～2029年までの12年で約6000人減少すると推定され、2029年4月を目処に学校数を現在の134校から121～124校にすることとしている。^{*1} また、学校の現状や地域の状況を見据えながら、近隣の学校を統合して、農業や探究、ビジネスといった強みのある分野を作り、それぞれの学校のブランド力を高めることを目標としている。私が勤める飯能高校は、その取り組みの第1期の対象となり、飯能高校から自転車で20分ほどの距離にある飯能南高校と統合することになった。新校のコンセプトは「進学を重視した地域と協働する高校」である。それを達成するため、新校では進学、単位制、探究、そしてICT教育の4つの点に力を入れていくことになった。

3. 新校の課題

新校は2023（令和5）年から、もともと飯能高校がある校舎で発足することになった。私が着任する前から、飯能高校が統合することは決まっていたが、着任してみると、大枠は決まっていたものの、新校の名前やコンセプトを達成するための具体的な方策は決まっていなかった。そんな折、新校の名前が発表された。「飯能高校」である。異なる2つの学校が1つになるというのに、片方の学校の名前がそのまま採用されたのである。ちなみに、校歌や校章は現在も旧飯能高校のもののみである。また、令和4年度入学者選抜まではそれぞれの学校で行われた。それによって、新校が発足した後も、旧飯能南高校には生徒が在籍することになる。よって旧飯能高校校舎は本校舎、旧飯能南高校校舎は南校舎と呼ばれることになった。

新校の一番大きな課題として挙げられるのが、在校生と新校のコンセプトの間にギャップがあることだ。新校のコンセプトは「進学を重視した地域と協働する高校」である。しか

し、統合したのはいずれも進学校とは言えない2校である。旧飯能高校は偏差値40程度で、進路先は大学進学が2割、専門学校への進学が4割、就職が2割、短大その他が2割程度である。また、旧飯能南高校はスポーツ科があり、勉強よりもスポーツで学校を盛り上げていくといったような学校である。そのような2校から、進学を重視した学校を作り上げるようになった。

進学校になるという目標を達成するために2つの取り組みをしていくことになった。一つ目が、大学受験に対応する仕組みを整えることである。旧飯能高校では、多様な進路に対応できる仕組みがある一方で、大学進学、特に一般選抜で大学進学を志す生徒へのサポートが十分ではなく、数名の生徒が孤軍奮闘しているような状態であった。そこで新校では、校内の学力の中下位層を支援しつつも、授業の難易度を上げることや教育課程の再編成、補習や教員による生徒の学習個別支援の体制を整えていった。

二つ目が、入学者の層を変えることである。旧飯能高校の入学者は、「行きたい」ではなく「行ける」から飯能高校を選択する生徒が多かった。その結果、勉強への意欲が乏しい生徒が大多数であった。そこで入学者の層を変える方策として、まず特進クラスを設置した。

飯能高校の特進クラスは、20～30人程度の少数クラスで、難関私立大学を一般選抜で合格することを目標として設置されたクラスである。他の入学生と同じ選抜試験を受け、入学許可者になった後に、特進クラスへの在籍希望者は、学力試験の結果や面談等を経て、選抜された生徒が、特進クラスに入ることを在籍することができる。進学重視の新校のコンセプトの目玉となるものだ。広報活動としても、中学生に向けては、中学時代に勉強で苦戦した生徒も、高校3年間でしっかり勉強して、卒業の時には中学時代には考えることができなかったような進路先への進学を実現する、「出口で勝負する特進クラス」という形でアピールしている。一方で、今年度は特進クラスが発足して2年目となるが、特進クラスの数合わせにも苦労している状態である。本来は20人～30人程度のクラスを想定していたが、在籍数は現2年次生は14人、現1年次生は12人のみである。また、特進クラスといっても、偏差値60や70の生徒が入学するわけではない。現状は勉強への意欲を重視して特進クラスに所属することになった生徒が大多数である。現在、私は2年次生の特進クラスの英語コミュニケーションⅡの授業を担当している。彼らが1年次生の時には、接点はなかったのだが、いざ授業を担当してみると、特進クラス内でも生徒の学力の差がある。英語の学力でいうと、英検等の外部利用試験などが比べる指標になるのだが、英検2級に合格する生徒もいれば、英検3級が合格できない生徒もいるといったように学力がまばらな状態である。そのような中で、難関私立大学合格のための、学力を担保するような授業を展開することは困難ではある。しかし、特進クラスの生徒は勉強への意欲は非常にある。私自身も刺激を受けることが多々ある。彼らに少しでも力をつけさせるために、試行錯誤の毎日である。

少々話が飛躍してしまったが、入学者の層を変えるという点に戻る。飯能高校は、他にもICT教育の充実と特色のある探究的な学びをアピールすることで、入学者の層を変えようとしている。つまり、学習環境が充実しているという点で、勉強に意欲のある中学生を惹きつけようとしている。ICT教育の充実という点では、他の県内公立高校よりも早く一人一台端

末を整備した。また、Google for Education やロイロ認定ティーチャーなど、教員の ICT 運用力にも力を入れてきた。私自身も、校内の ICT 活用推進委員会のメンバーとして、Google for Education の資格とロイロ認定ティーチャーとなった。また、探究という点では、飯能高校の特色として、探究学習を推進している。現在の教育業界の大きなトピックとなっている探究学習だが（校内の探究担当になって日々試行錯誤している教員方もたくさんいると思う）、飯能高校では、地域創造学という探究をメインに取り扱った授業や、部活動としての探究部もスタートした。これらの他の高校にない特色ある試みで、入学者の層を変えようとしている。

そして、最後が生徒募集の活性化である。私が新校立ち上げにあたって、最も関わってきた部分でもある。なぜなら、私が所属する分掌の広報情報管理部の広報の面であるからだ。そして私は主に中学生を対象とした生徒募集に尽力した。そもそも広報情報管理部は、新校発足に伴い、新しくできた分掌である。以前の飯能高校の生徒募集は、数名による活動であった。そのため、自らの分掌だったりの業務に加えて行う必要があったので、広報活動における人数、時間的猶予、質などが不足せざるを得なかったのである。それらの課題を解消し、より効果的で継続性のある広報活動を展開していくために、広報情報管理部は発足し、発足と同時に私はそこに所属することになった。そして主に学校の広報活動を担当することになった。

学校の広報担当として意識したことが、学校説明会の活性化である。より学校のコンセプトが伝わるような学校説明会を行ってきた。統合前の飯能高校と統合後の飯能高校は全く異なるということを中学生に伝える必要があったからだ。新校のコンセプトが「進学を重視した地域と協働する高校」である一方で、地元の学力の低い学校というイメージが根深かった。地元の中学校の学力上位層の生徒はいうまでもなく、中位層の生徒も飯能高校という進路選択は取らないのである。飯能高校に入学する生徒の多くは、中学時代に、勉強に苦手意識を持ち、学習への意欲も低い生徒である。高校として、そのような生徒たちを責任を持って育てることは必要だが、「飯能高校に入学したら勉強しなくてもいい」というイメージは拭い去りたかった。そうするために、学校説明会では、進路指導や単位制についてなど、中学生にとっては退屈でつまらない説明会だったかもしれない。しかし、飯能高校に入学したら、勉強して卒業する必要があるということを伝えたかったのである。しかし、学校説明会に一度も来ることなく、志望する生徒も中にはいる。そもそも学校説明会に来る生徒は、ある程度の進路意識や、意欲もあるので、入学後も学校生活に前向きに取り組む生徒が多い。学校説明会に来ない生徒は、冬の1～2月になって、焦って進路先を決定してしまう生徒も多く、説明会に行っていなくて、学校のこともよく知らないけれども飯能高校なら入れるという考えで、志望することが多い。その結果、新飯能高校のコンセプトを理解してなくて、イメージとのギャップができてしまうことが多々ある。それを避けるために、中学生に学校説明会に来てもらう、開催を周知することにも力を入れた。従来の中学校訪問や、塾訪問に加えて、中学生と関わる機会を増やすことを意識した。埼玉県では、多くの中学生が北辰テストと呼ばれる模試を受けるのだが、その会場で学校案内の要約版のようなリーフレットを

配布した。また、中学生向けに高校受験対策講座を開催して、中学生に埼玉県の高校入試のポイントや勉強法をレクチャーした。そしてそれらのイベントの時に、新校のコンセプトや概要を話して、少しでも飯能高校に興味を持たせて、学校説明会に訪れてもらうようにした。また、SNS を大いに活用した。LINE や Instagram、YouTube で学校の情報や、各部活動の活動を広報して、飯能高校での学校生活をイメージできるようにした。また、今年度はTV 出演もした。これらの広報活動によって、新校発足してから、二度の高校入試があったが、いずれも欠員募集は免れた。また、今年度は12月時点で、中学生の志望状況調査で、倍率が1.08 となった。^{*2} 昨年度の同時期の倍率が0.85 だったことを考えると、広報活動は着実に成果がでていると言っているだろう。

新校のコンセプトである「進学を重視した地域と協働する高校」になることができるのかは、現時点では不明である。ただ、来年度が新校発足して3年目となり、新飯能高校の生徒として入学してきた生徒たちが学校を占めることになる。よって特進クラスが受験生になる来年度の進路実績が一つの鍵となると言える。ここで少しでも結果を出すことができれば、進学に力を入れている飯能高校というイメージを少しでもアピールすることができるのではないかと考える。ただ、進学を重視する新校になってから始めた取り組みが多々あるので、それらの取り組みを校内に根付かせて、長期的なスパンで進学校になっていくという視点も必要である。

新任教員が新校立ち上げに携わってみて感じたことは、新たなものをつくりあげているワクワク感である。旧飯能高校とは全く異なるコンセプトである、新飯能高校を作っていくにあたって、多くの新しい取り組みはスタートした。0 から1の取り組みを当事者として参加できることが貴重な経験である。学校によっては、ルーティン化されていて、新しい取り組みがなかなかできないところもあると思うが、新校の場合はたくさんのチャレンジができる。そしてそれが、今後数十年の学校の取り組みになり受け継がれていくということを考えると非常に魅力的な業務である。良くも悪くもスタートアップ企業のような労働環境で、エネルギーを必要とするが、新人のうちにこのような学校に赴任して、様々な試みができるのは幸運だと考えている。

4. 教員4年目の現在

これからは自分の4年間の教員生活を振り返っていく。教員1年目の時は、教員としても社会人としても1年目であり、何もわからず無我夢中で目の前の業務に取り組んだ。学生の時には知り得なかった教員の授業以外の業務も多く学んだ。また、コロナ禍だったので、分散登校や、ソーシャルディスタンスに配慮した学習活動も展開した。発声や、インパーソンのコミュニケーションが制限する中で、英語科教員として、どのようにしたら有意義な英語の授業を行うことができるかどうか試行錯誤した年でもあった。

2年目となり、ホームルーム担任を初めて持つようになり、より生徒と密接に関わることが可能になった。この年は、私自身が知らず知らずのうちに持っていた、在るべき学校の姿のステレオタイプの考えを見直すきっかけにもなった。学校に登校することが必ずしも良

いとは限らないこと、勉強が苦手というのは単なる努力不足で片付けてはいけないということ。私が今まで関わってきたことのない生活を送ってきた生徒と関わることで、今まで自分は、ただ周囲に恵まれていただけなのだと、自分自身を見つめ直すきっかけになった。

3年目には修学旅行があり、修学旅行を主担当として無事に終えることができ、教員としても成長できた。そして3年目は、新校がスタートした。そして、部活動では旧飯能南高校の生徒と関わる機会が増えた。旧飯能高校生徒が過ごす本校舎、旧飯能南高校の生徒が過ごす南校舎というように学校生活は異なる校舎で過ごしているが、部活動の大会に出場する際は、一つの高校として見なされるので、南校舎の生徒とは部活動の時だけ関わることになった。普段の学校生活での様子を知らない生徒たちとの関わり方や、指導の仕方に最初は戸惑ってしまったが、最終的には良い経験となった。

そして現在の4年目である。初めて担任を持った生徒たちと、一緒に学年を上がってきて、3月には初めての卒業生を出すことになる。私は卒業生を一度出すことができたなら、教員を退職しようと考えていた。教員の仕事が嫌になったからではなく、教員になることを決めた時に、4年間だけ教員を続けようと考えていたからである。国際日本学部を卒業したので、グローバルな環境で働きたいという思いは常に持っていた。それでも、この思いを翻し、もう少し教員を続けることを決めた。その理由は、こんなにも無償で他者のことを思い、行動できる職は少ないからだ。県立高校の教員は、生徒の合格実績や部活動の結果が良いからといって、給料が上がるわけではない。自分には目に見える見返りがなくても、誰かのために一生懸命できるというのは素晴らしいことだと感じた。そして私はそれを行うのが嫌ではないのだと気付いた。その時に、もう少し教員という職を続けようと思った。

県立学校の教員は異動がある。学力の高い学校で働くこともあれば、学力の低い学校で働くこともある。問題行動が起こることが多い学校もあれば、生徒指導がほとんどないような学校もある。行く先々で、新たな未知の体験ができる。そしてそれは自分を成長させることが間違いない。県立学校で働くことの魅力はこれなのではと私は考えている。

5. 最後に

大学生の時の自分は、まさか自分が明治大学教育会で発表する側になるとは思っていなかった。今回、私が発表することになったきっかけは、同じ学校で働く先輩が勧めたからである。彼もまた明治大学を卒業し、私と同じ学年で、同じ部活動を担当し、未熟な私を日々サポートしてくださっている。彼も以前に教育会で発表している。そんな彼が、発表者募集の締め切りの日に、私にこの教育会の話を持ちかけたのである。そして、私は軽い気持ちで引き受けてしまった。想像していた以上に、準備することがあり、時には引き受けたことを後悔する時もあったが、実際に発表してみると実りが多かった。自分の今までの取り組みや、教員としての生活を振り返る良いきっかけになった。また、明治大学出身の教員との新たなつながりもできた。この場を借りて、その先輩に感謝を伝えようと思う。ありがとうございました。

教職課程を履修している学生のうちには、教員になることを志す人もいれば、教員免許を

取得しておくという学生もいると思う。どの選択も間違っていないと思う。民間企業での経験を積むこともいいだろう。その経験がある教員もまた非常に魅力的である。ただ少しでも教員という職に就きたいと思ったのならば、長い人生の中で、少しの期間だけでも挑戦してみても良いと思う。実際に行動してみて、分かることも多々ある。

私が今日まで教員を続けることができているのは、今まで私と関わってきた先生方、職場の同僚、そして生徒たちのおかげである。この感謝の心を忘れずに、そして次は私が彼らに何かを与えることができるように、日々精進し、教員としての人生を送っていきたいと思う。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった教育会のすべての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献・引用

*1:「埼玉県 HP」<https://www.pref.saitama.lg.jp> (2025 年 1 月 6 日閲覧)

*2:「埼玉県教育委員会 HP」<https://www.pref.saitama.lg.jp/e2201/shinrokibou202412.html>
(2025 年 1 月 9 日閲覧)